ある頃からザ・フー（The Who）のことが好きになった。ビートルズ、ローリングストーンズの３大バンドの中でどれが好きだと言われればっていう意味での好き。気付けば一番、きゅん！！ってなるようになった。

その日、その時の気分によるんだけど、あんなに好きだったビートルズがこの中ではビリで。ストーンズのだらしなくて不良っぽい感じのかっこよさとザ・フーが気分によって入れ替わる。

この３組の中では演奏の音がバカでかく荒々しかったことで有名なんだけど、それとピートタウンゼントの思春期真っ盛りの少年の繊細さと苛立ちをつづった歌詞が好きで。年老いる前に死んでしまいたい、大人はいつだって俺たちのことを分かってくれない、でもそれをなかなか言葉に出来ないという苛立ちをわざとどもりながら歌ってみせて、子供であるだけでもう充分なんだ。目が見えない、耳が聴こえない、口が聴けない少年トミーを主人公にしたアルバムを作ってみせたザ・フーのその佇まいがいつだって助けに来てくれる正義の味方、例えば、自分の部屋で、寝室で、ベッドの中で、体を丸めているだけでどうにも出来なかったような若い子をいつだって助けに来てくれる正義の味方みたいに思える。

公園で学校の校庭の片隅で立ちんぼで服のそでで何度も顔をごしごししてるような男の子をいつだって助けに来てくれそうな気持ちにさせてくれる。
マイジェネレイションでボーカルがわざと吃音のように歌ってみせて、ピートタウンゼントが演奏が終わったら床にギターを叩き付けて壊してキースムーンはドラムキットをぶっ壊してみせてたのを聞いてビートルズよりもストーンズよりもかっこいいと思えるようになった。

売れてゆき、人気も出て、そして年を重ねて行く自分たちにも向けてなんだろう。

「泣くな、それは十代の荒野に過ぎないのだから」